

◎すくすくと　　み　な　み

わが心小鳥の如くちよこちよこ草ほのあをむ
 丘に來れり
 思はざる樹に二つみつ新らしき芽を見てたる
 あさのよろこび
 よきことのしらせのやうに思はれて樹々のわか
 めに目をあそばせぬ
 のびてゆく草のやうにもすくすくといのちのび
 んど野にいててゆく
 のこりたる雪の中よりすくすくとべんべんぐさ
 ののびてゆくかな
 陽をすひてさやりもあらずのひでゆく若草のあ
 をにながめいりけり
 病院のまごの下なるいささかの土にも草のあを
 むうれしさ
 ほの青むうらわかくさのなつかしく軟き土ほり
 かへすかな
 ものいはすこもれる人の庭なれど春の命の青む
 うれしさ

◎かろがろと

文科一部三年 齋藤 加津

花ならばわれコスモスになりなましか、はりも
 なくのひてくせなき
 静なる春の光りにひたりつゝ鶯をきく身をはう
 れしむ
 朝のもやや、にうすれて山のひた赤く輝き明け
 そむる湖
 夕されはさためのように町の灯を見るをうれしみ
 ゆきなれし丘
 月青くさせるベツトに憂なくこほろきを聞く秋
 のうれしさ
 うす青うかすむ夕の遠山の山のかひより汽車の
 走り來
 飛行船ふはりと浮ふことくにも雲ひとつある夕
 焼けの空
 寸はかりのびし小麥に縞なして雪かろかるとお
 ける春の野
 ものかけにちらとかくれてわれを見る大きうな
 りし末の妹

隨筆

◎一輪草

わ　か　な

もうあれから半年余りになる。年も新たにな
 つた。けれども姉を看病しながら一月ばかり國
 の病院に過したあの頃のこととは今もありありと
 思ひ出される。
 姉の病室は拭き磨かれた長い廊下を通つて行
 く院内の一番奥の病舎にあつた。かなり廣い通
 氣のいゝ明るい室に姉は村尾さんといふ若い弱
 々しい人と二人ベッドを並べて病を養つてあ
 った。この室内には別に三疊敷の附添人の部屋が
 二間しきつてあつた。私は夏の盛りを此三疊敷
 の内で過したのであつた。
 姉の病氣は東京から想像してゐた程に重くは
 なかつた。その蒼白い顔に病む人らしいやつれ
 と淋しさを見るの外目に立つほどの瘡せも見
 えなかつた。隔日にする注射のために發熱する
 時の外晝間は大低ベッドを離れて植込に面した

涼しい廊下に椅子を持ち出して新聞や雑誌を讀
 んだり院内で親しくなつた人達と話したりし
 た。重患者のなかつた此病舎は割合に陽氣であ
 つた。
 上原さんといふ上品な年増の奥さんが見舞に
 貰つた物らしい果物や菓子を持つてよく話しに
 來た。姉は一番彼女と親しくした。彼女は一家
 の混亂からひざいヒステリーになやんでゐた。
 私は少女のやうな表情のある眼に涙を湛へてど
 らはれた不幸な身の上話をする時の彼女が一番
 好きであつた。
 村尾さんは白百合が好きであつた。柱掛の水
 色の花瓶には香の高い純白の百合が殆どいつも
 絶えなかつた。彼女の弱々しい容姿は露を含ん
 だこの花のやうであつた。
 或日彼女の附添の下女が外から小さい一輪草
 の鉢植を持つて歸つた。柔かな莖の頂きに可愛
 い桃色の花が一つ咲いて蕾が二つ三つあつた。
 彼女はまたこの花を愛した。水を與へたり暖か
 い日の光を吸はせたり色々自分世話をし